

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	親鸞使用の声点加点形式について：坂東本『教行信証』声点の位置づけ
Auther(s)	佐々木, 勇
Citation	訓点語と訓点資料, 129 : 1 - 18
Issue Date	2012-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00033664">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00033664</a>
Right	Copyright (c) 2012 Author
Relation	



# 親鸞使用の声点加点形式について ―坂東本『教行信証』声点の位置づけ―

佐々木 勇

## ○、本稿の目的

本稿の目的は、次の二点である。

1. 親鸞が使用した声点の形式を整理し、文章形式・訓読法との関係を明らかにすること。
2. 他の親鸞遺文と比較して多様な、坂東本『教行信証』の声点加点形式を、親鸞加点資料中に位置づけること。

## 一、親鸞自筆の声点図

親鸞は、次の文献に、声点図を残している<sup>1)</sup>。

西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』（巻首） 鎌倉時代初期写本。

西本願寺蔵『唯信抄』（巻頭） 寛喜二年（一二三〇）写本。

専修寺蔵『浄土高僧和讃』（巻頭） 親鸞自筆朱点か。

下は、西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』巻頭の点図を、推読を交えて記したものである。各壺に、声点を加点し、入声点の名称、および、語例が記されている。入声点には、「●清急」「一濁急」「●清緩」「一濁緩」の四種が有る。ただし、西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』巻頭の点図は、破損のため、読

解できない部分が存する。

しかし、幸い、文保元年・二年（一二三七・八）と正平六年（一二三五）の二回、存覚によつて書写された本にもこの点図が写されており、それによつて、元は左の通りであったことが知られる<sup>2)</sup>。

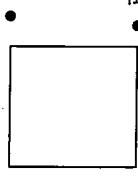
豊後國大義供奉聲

八幡大菩薩納受之聲也

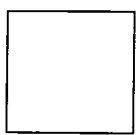
諸法

清急

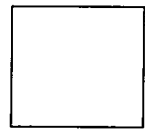
一濁急  
眷屬入清急 俱止



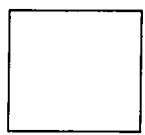
法入悲華  
法入悲師  
各入悲各



是從



●●清緩  
若入悲人  
諸法入悲  
各入悲與



○濁緩  
聽法入濁緩  
寂入濁緩 靜  
眷屬入濁緩

## 二、親鸞加点の声点

ところが、右三文献の本文に加点された声点は、声点図の声点とは異なる。

西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』は、点図と同じく、「●

清急」「濁急」「●清緩」で加点している。しかし、「濁緩」は、点図「○」ではなく、「●」を使用している。

また、西本願寺蔵『唯信抄』・専修寺蔵国宝本『三帖和讃』本文には、「●」と「○」との二種の声点しかない。いわゆる清濁を区別するのみである。<sup>3)</sup>

### 三、親鸞遺文における声点形式

そこで、親鸞加点資料を、声点の形式に着目して分類してみる。

ただし、坂東本『教行信証』の声点は複雑であるため、後に単独にとりあげることとする。

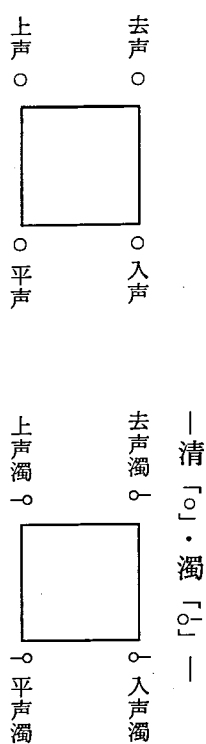
#### 1. 入声に急・緩を区別する声点形式

この形式では、入声以外の清音は「●」、濁音は「○」で示す。

この声点形式で実際に加点されている親鸞遺文は、『観經・阿弥陀經集註』の本文のみである。

a 西本願寺蔵『観經・阿弥陀經集註』經文(第七卷)  
(第七卷は、『増補親鸞聖人真蹟集成』における所収巻。以下同じ。)

#### 2. 入声に急・緩を区別しない声点形式A

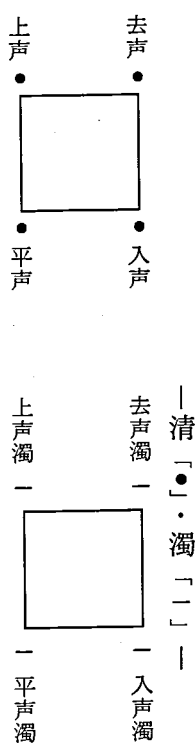


この形式の声点が加点されているのは、次の親鸞自筆本である。

b 西本願寺蔵『観經・阿弥陀經集註』註文(第七卷)、c 浄土論註朱点(第七卷)、d 浄土論註付疊鸞伝(第七卷)、e 大般涅槃經要文・業報差別經文(第九卷)、f 信微上人御釈(第九卷)、g 烏龍山師並屠兒寶藏傳(第九卷)、h 聖覚法印表白文(法専寺蔵本(第九卷))、i 晨旦國十四代(第九卷)、j 西方指南抄(第五・六卷)

右の本文は、漢文または漢語中心であり、それを訓読した文献である。<sup>4)</sup> なお、b 西本願寺蔵『観經・阿弥陀經集註』註文は、a の行間・上下欄・紙背の經論・釋等註文に、訓読のための訓点を加点したものである。<sup>5)</sup>

#### 3. 入声に急・緩を区別しない声点形式B



この形式の声点が加点されているのは、次の諸本である。

k 三帖和讃(第三卷)、l 唯信抄(西本願寺本(第八卷))、m 唯信抄(専修寺蔵信證本(第十卷))、n 唯信抄(東本願寺等蔵殘卷(第八卷))、o 唯信抄(最乗寺蔵断簡(第九卷))、p 尊号真像銘文(建長本(第四卷))、q 尊号真像銘文(正嘉本(第四卷))、r 皇太子聖德奉讃断簡(第九卷)、j 西方指南抄

ここに属する諸本は、いずれも、全体が漢字片仮名交じり文であるか、漢字片仮名交じり文を含む。<sup>6)</sup>

清「●」・濁「一」の声点は、右の全資料において、朱筆で書き込まれている。

以上、親鸞が加点了た声点は、右の三種に分けられる。<sup>7)</sup>

坂東本『教行信証』声点の分析によって知られている、入声に急・緩を区別する声点は、現存親鸞自筆本では、a 西本願寺藏『觀經・阿弥陀經集註』における字音直読の經本文にしか見られない。

この実態から、入声に急・緩を区別する声点加点は、親鸞加点の声点形式の中で、特殊なものであったことが知られる。<sup>8)</sup>

#### 四、坂東本『教行信証』の声点

右の状況から、漢文に訓読の訓点を加えられている坂東本『教行信証』には、入声に急・緩を区別せず、清「○」・濁「一」とする形式(2.)での声点加点が予想される。

しかし、坂東本『教行信証』には、  
[o][o][o][o][i][i][●][i][i]  
と、多様な声点が加点されている。

##### 1. 坂東本『教行信証』の声点に関する先行研究

小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』第2集、一九六五年九月)は、坂東本『教行信証』の声点は、入声に急・緩を区別しており、「急」は舌内入声音、「緩」は喉内・唇内入声音に対応することを説いた。とこ

ろが、この対応原則には、例外が多く存した。

十年後、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」(『国文学攷』第六十九号、一九七五年十月)で、「入声急」には促音も含まれることが指摘され、例外は減少した。はじめに引用した親鸞自筆声点図でも、「急」の語例として挙げられていたのは、「法<sup>訓</sup>華<sup>訓</sup>」「法<sup>訓</sup>師<sup>訓</sup>」「各<sup>訓</sup>各<sup>訓</sup>」「眷属<sup>訓</sup>俱<sup>訓</sup>」の促音化例であり、「緩」の語例は「若<sup>訓</sup>人<sup>訓</sup>」「諸法<sup>訓</sup>」「各<sup>訓</sup>與<sup>訓</sup>」「聴法<sup>訓</sup>」「寂<sup>訓</sup>」「静<sup>訓</sup>」「眷属<sup>訓</sup>」の促音化しない音環境の例であったことから、「急」の入声点が促音をも標示していたことは明らかである。

しかし、後に示す『觀經・阿弥陀經集註』字音直読の入声点と比較すれば、『教行信証』入声点には、対応規則の例外が多々残る。それは、多種の声点が、時を隔てて加点されているためではなからうか。

小林論文は、坂東本『教行信証』の訓点を、次の四種に分けている。左に、要約する。

第一次点A類―墨筆。本文と同色同筆の仮名。他次の仮名と比較して字形が最も大きく太い。全巻に亘って詳細に加えられており、本資料中訓読文の根幹をなす最も重要な加点である。

第一次点B類―墨筆。A類と同色、同じ筆致と見られるが、A類の仮名に比べてやや小字である。全巻に散在し、主として、本文中の漢字に単字としての音又は訓を示す。第二次点―朱筆か。第一次点と比較して仮名の字体は略同趣である。各巻に散在し、第一次A類の仮名を上から訂して別語とし、或いは彼を補い、又音訓を新たに加える。

第三次点―墨筆。仮名の大きさは、第一次点B類と同じくやや小字であるか、丸味を帯びる。第一次点よりやや新体をも認める。(これらは鎌倉時代中期の他資料の仮名字体に通ずる)。

右の中、第一次点A類・第一次点B類と第二次点とは筆致に共通するものがあり、同一人の筆と認められる。第三次点はやや異なる印象を受けるが、これは恐らく用筆の相違によるもので、やはり同一人が時を隔てて加えたものと思われるべきであろう。

小林論文は、声点についても右の別が存することを、「漢字音」項目の「断書」で指摘している。

漢字音の清濁及び四声を示す各種の符号は、墨色から見て第二次点は判明するが、他は、筆勢や大小から第一次A・B、第三次点が存することは知られるが、一々についての区別は困難が多いので、一緒に扱った。いずれにしてもその年代的差は、二三十年の違いと考えられる。

## 2. 坂東本『教行信証』声点の分類

小林論文の述べる如く、声点を加点時で分類することは困難である。

しかし、声点の墨色・大小と形から、以下の三種は区別可能である。(本稿の調査・引用は、原本閲覧の機会が得られなかったため、『顯淨土眞實教行證文類(坂東本影印本)』(二〇〇五年、真宗大谷派宗務所)を使用した。ただし、用例の所在は、便宜的に『親鸞聖人眞蹟集成』の頁数・行数(三<sup>5</sup>.3は、三の五頁三行目)で示す。)

### ① 墨声点・大



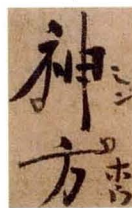
(二)  
138.1



(二)  
32.1



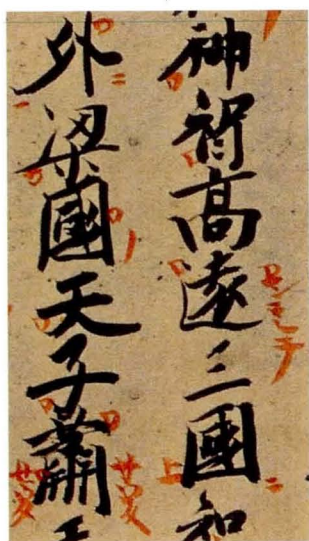
(二)  
35.4



(三)  
5.3

右の如く、大きな墨声点の○は、右下斜線と半円との二画で書かれている。

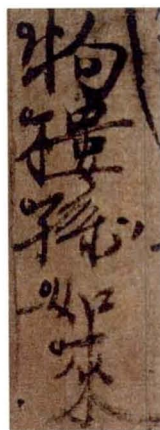
これは、親鸞真筆の代表とされてきた、左の『浄土論註』巻末「曇鸞伝」朱声点と同じ書き方である。



(『御影堂平成大修復事業記念西本願寺展』に依る)

### ② 墨声点・小

坂東本『教行信証』の小さな墨声点○は、①墨声点・大と異なり、半円を二つ書くか一画で円を書く。次の如くである。



(六末 46.7)



(六末 47.1)



(六末 92.1)

「聖曆」の声点は大。ただし、「曆」の外側声点是小。

### ③ 朱声点

朱声点も、書き方は、②墨声点・小と同様である。「・」も、比較的多く見られる。



「七字目「鼓」の朱声点は、墨声点・大に重書

(二二 110.4)



(二 48.3)



(二 48.8)

以上の加點実態から、①墨声点・大が先、②墨声点・小、③朱声点が後に加點されたことが知られる。

3. 坂東本『教行信証』における三種声点の形式と加點数  
①墨声点・大

坂東本『教行信証』墨声点・大は、「○」と「o」のみであった。本稿巻末に、その全例を掲げる。

「○」——一〇三例(内、入声字七六例)

「o」——一七四例(内、入声字二五例)

「○」が清を示し、「o」が濁を示すことは、先行研究で検討済みである。「○」・「o」共に、入声の急・緩を区別せず、平声・上声・去声・入声(舌内・唇内・喉内)のいずれでも用いられる。

この墨声点・大は、先に分類した声点形式2にあたる、親鸞が漢文訓読資料に使用した形式である。

### ② 墨声点・小

墨声点・小には、「o」「o」「o」「o」「o」が存する。数の多い順にその例数を記すと、左の如くである。

「o」——一三三三例(内、入声字 二二六六例)

「o」——一〇九〇例(内、入声字 七八例)

「<sup>oo</sup>」――三五二例(内、入声字 三三八例)  
 「<sup>o</sup>」――三二七例(内、入声字 一六二例)  
 「<sup>・</sup>」――七六例(内、入声字 一一例)  
 「<sup>一</sup>」――四一例(内、入声字 四例)  
 「<sup>・</sup>」は少数であり、分布の片寄りは見られない。小さな円がつぶれてしまったものかもしれない。この点、未詳であるため、墨声点「<sup>・</sup>」は、以下の検討から除外する。

### ③朱声点

本資料に加点された朱声点を、加点例数順に並べると、次の通りである。

「<sup>・</sup>」――五五四例(内、入声字 四〇例)  
 「<sup>一</sup>」――三五一例(内、入声字 一六例)  
 「<sup>o</sup>」――二六一例(内、入声字 一八例)

表1 西本願寺藏『觀經・阿弥陀經集註』經本文の入声点  
 「急」の入声点

喉 k内		唇 p内		舌 t内		声点	
						下接字頭音	
濁急	一	濁急	一	濁急	一	無声	24
清急	●	清急	●	清急	●	有声	27
0	1	0	0	9	9	句末	20
0	1	0	0	8	8		

「緩」の入声点

喉 k内		唇 p内		舌 t内		声点	
						下接字頭音	
濁緩	●	濁緩	●	濁緩	●	無声	5
清緩	●●	清緩	●●	清緩	●●	有声	6
11	36	6	7	0	0	句末	0
18	37	11	10	0	0		
28	15	9	8	0	0		

「<sup>oo</sup>」――五一例(内、入声字 四八例)  
 「<sup>o</sup>」――五〇例(内、入声字 四二例)  
 「<sup>・</sup>」――四五例(内、入声字 三四例)  
 「<sup>・</sup>」――二八例(内、入声字 二七例)  
 朱点は、本文・他の訓点と紛れることがないためか、円を書かず、点を打つだけのものが比較的多くを占める。

4. 坂東本『教行信証』墨声点・小と朱声点における入声点次に、坂東本『教行信証』入声点の特徴として指摘されている、入声音・促音との対応関係を見る。

それに先だち、比較のため、入声に急・緩を区別する声点加点が見られた西本願寺藏『觀經・阿弥陀經集註』經本文における親鸞加點入声点の実態を見る。



右の如く、親鸞が「急」と呼ぶ入声点は、舌内入声字、および、無声音が続く唇内・喉内入声字に加点される。また、「緩」の入声点は、唇内・喉内入声字に加点されるのを原則とする。

「急」入声点の例外は、喉内入声字「逼」への加例二例である。

〔逼〕所逼（入声）云（上声）何（平声）當見（入声）（観一三五）此人苦逼（入声）（観五九六）

「逼」は、保延本『法華經單字』鎌倉期点で「ヒツ」、觀智院本『類聚名義抄』「和音」でも「ヒチ」と仮名書きされている。圖書寮本『文鏡秘府論』保延点、興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点にも「ヒツ」の加点が見られ、当時の日本漢字音では、舌内入声字相当に扱われている。親鸞遺文でも、「逼（入声）惱（入声）」（坂東本『教行信証』三15.6）「逼（入声）隘（入声）」（『浄土論註』上29）と、舌内入声同様とした例が有る。そのため、本資料でも、舌内入声字に加点される「急」入声点が加点されたもの、と考

表2 坂東本『教行信証』墨声点・小の入声点

「急」の入声点

喉内 k		唇内 p		舌内 t		声点 下接字頭音
濁急 一	清急 ○	濁急 一	清急 ○	濁急 一	清急 ○	無声
5	18	9	22	24	80	
0	1	0	1	6	24	有声
1	3	0	2	30	71	語末

「緩」の入声点

喉内 k		唇内 p		舌内 t		声点 下接字頭音
濁緩 ○	清緩 ○○	濁緩 ○	清緩 ○○	濁緩 ○	清緩 ○○	無声
39	75	7	21	2	1	
18	60	9	23	4	8	有声
61	121	13	19	7	6	語末

えられる。

また、「緩」入声点における例外は、舌内入声字に「緩」声点が加された、左の十一例である。

（一）一（入声）ハ2例V 一（入声）寶像 第十一（入声）觀 一（入声）日 佛（入声）說（入声）無（入声）量（入声）壽（入声）觀（入声）經（入声）一（入声）卷（入声）（七）第七（入声）觀 經七（入声）日 第八（入声）觀（入声）（日）日（入声）日 日（入声）没（入声）

「一・七・八・日」は、いずれも古くから日本語中で用いられてきた字音であろう。そのため、字音直読の際も、加声点の通り、開音節化して発音されることがあったものと考えられる。

この西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』經本文と同様に、坂東本『教行信証』②墨声点・小の入声点を整理すると、左表2の如くなる。



右のとおり、坂東本『教行信証』墨声点・小の入声点も、「急」入声点は舌内入声字と、無声音が続く唇内・喉内入声字に、「緩」入声点は唇内・喉内入声字に加点される。入声の急・緩を区別しない①墨声点・大を別にしたことで、先行研究の整理と比較して、対応原則の例外は少なくなった。しかし、なお次の例外が残る。

○語末または有声音が続くにも拘わらず「急」入声点が加点された唇内・喉内入声字(八例)

〔濕〕濕シツ〔四10.7〕・阿濕アシツ婆國ハコク(六末26.5)〔十〕十シツ〔六末60.5〕〔足〕滿マン足シツ(五51.3)〔色〕容色シツ(四8.1)〔錯〕疑ギ錯サツ(六本27.2)〔翼〕翼ヨク(六末22.9)〔赤〕赤シツ白ハク銅ドウ(六本97.1)

○「緩」入声点が加点された舌内入声字(二十八例)

〔一〕一シツ(六本50.8)・第一ダイ(六本73.5)・一シツ百ヒャク五ゴ十ジュウ十ジュウ

表3 坂東本『教行信証』朱声点の入声点  
「急」の入声点

声点	下接字頭音		無声	有声	語末
	濁急	清急			
舌内 t	濁急 一	清急 ○●	5	2	2(4)
唇内 p	濁急 一	清急 ○●	6	0	0(0)
喉内 k	濁急 一	清急 ○●	1	0	0

「緩」の入声点

声点	下接字頭音		無声	有声	語末
	濁緩	清緩			
舌内 t	濁緩 ○●	清緩 ○●	1(0)	2(0)	4(2)
唇内 p	濁緩 ○●	清緩 ○●	2(1)	2(1)	6(4)
喉内 k	濁緩 ○●	清緩 ○●	10(9)	5(5)	11(13)

年(六末79.4)・一シツ時ジツ(四28.5)・一シツ日ジツ(六末59.5)・一シツ異イ(六本17.2六末60.6)〔日〕日ジツ(四26.6)・一シツ日ジツ(六末59.5)〔活〕邪ジャ活クワツ(六本96.1)〔實〕實ジツ(四36.6五19.1五28.2)・實ジツ半滿權(六本3.7)〔別〕別ジツ傳デン(六末93.4)〔佛〕佛ジツ言ゴン(一179.1)・化ハ佛ジツ菩ポ薩サツ(四26.5)・佛ジツ(五19.1)・佛ジツ士シ(五74.6)・釋迦佛ジツ(六本78.1)・唯ウ佛ジツ(六末84.2)〔述〕十シツ異イ九ク述ジツ(六末0.6)・述ジツ(六本90.3)〔闊〕各闊カク(一129.2)〔説〕領リョウ説ジツ(一154.6)〔決〕決ジツ定テイ(一167.7)〔殺〕殺ジツ害ガイ(一176.3)〔出〕出ジツ沒モツ(四50.7)

次に、朱声点についても、入声字に加点された入声点と入声音・促音との関係を整理すると、表3となる。これまでと同じ形式の表にするため、「●」「●●」「●」の加点数を( )内に記す。

右の通りであり、区別した「●」等は、声点の機能としては「○」等と同等である、と見られる。そこで、以下、朱声点では両者を区別せずに扱う。

この朱声点には、全体の加点数に比して、対応規則から外れる例が多い。次の例である。

○語末または有声音が続くにも拘わらず、急の入声点が加點された唇内・喉内入声字(九例)

〔逼〕逼<sup>ヒツ</sup>惱<sup>ス</sup>(115.6) 〔接〕接<sup>シユ</sup>誘<sup>イ</sup>(423.5) 〔德〕

至<sup>シ</sup>德<sup>トク</sup>(1108.7)・至德<sup>シトク</sup>(1143.8)・德<sup>トク</sup>號<sup>カウ</sup>(1162.6)・德<sup>トク</sup>號<sup>カウ</sup>(1114.5) 〔督〕督<sup>トク</sup>(1148.7) 〔略〕廣<sup>クワ</sup>

略<sup>リョク</sup>(1176.2) 〔弱〕怯弱<sup>ニヤク</sup>(1125.7)

○緩の入声点が加點された舌内入声字(十三例)

〔一〕一<sup>イツ</sup>百<sup>ヒャク</sup>俱<sup>ク</sup>抵<sup>テイ</sup>界<sup>カイ</sup>(1102.3) 〔佛〕阿彌陀佛<sup>アミトフツ</sup>

解<sup>ケ</sup>(1143.3)・佛<sup>フツ</sup>名<sup>ナ</sup>(1197.7) 〔脱〕解脫<sup>ケダツ</sup>(1176.8)・

解<sup>ケ</sup>脫<sup>ダツ</sup>(1127.7) 〔實〕實<sup>ジツ</sup>(1151.5) 〔逸〕放<sup>フウ</sup>逸<sup>イツ</sup>

別<sup>ベツ</sup>(1161.5) 〔別〕別<sup>ベツ</sup>號<sup>カウ</sup>(1147.8) 〔述〕宣<sup>セン</sup>述<sup>ジツ</sup>(1175.2) 〔伐〕

伐<sup>ハチ</sup>忽<sup>コツ</sup>(1129.4) 〔忽〕忽<sup>コツ</sup>然<sup>ニヤク</sup>(1129.1)

5. 坂東本『教行信証』墨声点小・朱声点と他の親鸞遺文

声点との相違点

右のとおり、坂東本『教行信証』墨声点・小と朱声点とは、親鸞自筆『觀經・阿彌陀經集註』經本文の声点に近い形式および機能を持つ。

しかし、坂東本『教行信証』墨声点・小と朱声点は、『觀經・

阿彌陀經集註』と次の諸点で異なる。

A. 入声以外に、「○(●)」を濁声点として使用する点。

坂東本『教行信証』の墨声点・小と朱声点は、濁声点として「一」を使用しながら、入声字よりも平上去声字に多く、「○(●)」を濁声点として用いている。

しかし、『觀經・阿彌陀經集註』經本文の声点は、平上去声では、濁声点に「一」のみを用いる。

B. 入声以外に、「○○(●●)」を濁声点として使用する点。

『觀經・阿彌陀經集註』經本文の声点では、「●●」は、入声字に限定して使用されている。

しかし、坂東本『教行信証』では、「○○」が入声以外に加點された例が小林論文ですでに指摘されている。墨声点・小の次例(四例)である。

鳩<sup>トビ</sup>槃茶<sup>ハツ</sup>(六末20.1)・鳩槃茶<sup>トビハツ</sup>(六末26.4)・擅<sup>タ</sup>菟<sup>ト</sup>

婆<sup>ハ</sup>(六末24.2)・種智<sup>シュ</sup>(六末42.1)

右の外に、「○○」を入声字以外に加點した例が、墨声点・小に十例存する。

應化<sup>オウ</sup>道<sup>ダウ</sup>(四22.6)・昂<sup>オウ</sup>(六末21.7)・軫<sup>シン</sup>(六末22.9)・尾<sup>ビ</sup>

槃遮<sup>ハツ</sup>羅國<sup>ラコク</sup>(六末26.3)・村<sup>ムラ</sup>落<sup>ラク</sup>(六末26.9)・賢<sup>ケン</sup>首<sup>シュ</sup>

(六末38.8)・事<sup>ジ</sup>(六末85.3)

朱声点にも、「●●」を入声字以外に加點した例が存する。

「我<sup>ガ</sup>」(1148.6)

これら十五例の「○○(●●)」は、濁声点であろう。

ところが、他文献で親鸞は、「○○(●)」を濁声点として使用していなかった。

C. 入声字以外に入声点を加した例、入声字に入声以外の声点を加した例が存する点。

これも、小林論文に部分的な挙例がある。坂東本『教行信証』全体では、次の用例数である。

入声字以外に入声点を加した例

墨声点・小 七例、朱声点 三例

入声字に入声以外の声点を加した例

墨声点・小 二五例、朱声点 八例

このような例は、坂東本『教行信証』墨声点大と『観經・阿弥陀經集註』声点中には、皆無である。<sup>14</sup>

D. 入声急・緩の対応規則に、比較的例外が多い点。

坂東本『教行信証』入声急・緩の対応規則例外のうち、「通・一・日」は、『観經・阿弥陀經集註』経本文声点でも、全体の傾向から外れる漢字であった。

しかし、『観經・阿弥陀經集註』経本文には、「接・十」「足・色・錯・赤」に無声子音が続く場合以外の急声点加點例は無く、「佛・實・別・説・出・脱・逸・劣」に緩声点加點例は無い。<sup>15</sup>

これらの点から、坂東本『教行信証』墨声点・小と朱声点は、親鸞自筆加點であることに疑問が持たれる。<sup>16</sup>

## 五、結び

以上、本稿では、次のことを述べた。

浄土真宗の開祖親鸞(一一七三—一二六二)は、左の、三種類の声点形式を使い分けていた。

1. 入声に急(舌内入声音と促音)・緩(喉内・脣内入声音)を区別する声点形式

清「●」・濁「一」とし、入声には「清急●」、「濁急一」、「清

緩●」、「濁緩●」を区別する。この声点形式は、漢文を音で通読する、いわゆる字音直読資料に用いられている。

2. 入声に急・緩を区別しない声点形式A(清「○」・濁「一」)

清「○」・濁「○」のみを区別する。この形式の声点は、漢文または漢語中心の本文であり、漢文本文部分を訓読した文献に使用されている。

3. 入声に急・緩を区別しない声点形式B(清「●」・濁「一」)

清「●」・濁「一」のみを区別する。この形式の声点は、漢字片仮名交じり文であるか、漢字片仮名交じり文を含む文献に使用されている。

また、漢文訓読資料である坂東本『教行信証』は、清「○」・

濁「○」のみを区別し、入声に急・緩を区別しない形式の声点加點(右の2)が先ずなされ、その後、別形式の声点が重ねられている。<sup>17</sup>後に加點された小さな墨声点と朱声点は、他の親鸞遺文の声点に見られない加點実態を示す。したがって、親鸞一人の訓点を問題とする場合は、正確を期すため、坂東本『教行信証』における小さな墨声点と朱声点とを対象外とするのが望ましい。

注

- (1) 『御影堂平成大修復事業記念西本願寺展』(二〇〇三年、東京国立博物館)、『増補 親鸞聖人真蹟集成 第三巻』(二〇〇七年、法蔵館)等、参照。『観經・阿弥陀經集註』の声点図は、本文中に述べるように、存覺によつて、二度写されている。また、専修寺蔵『浄土高僧和讃』は、四日市市中山寺蔵『浄土高僧和讃』文明十五年(一四八三)真慧書写本の卷末に写されている。

- (2) 西本願寺蔵寛喜二年(一二三〇)親鸞自筆書写『唯信抄』(巻頭)の声点図も、右とほぼ等しい。ただし、声点図・語例は墨で記され、朱声点に加点されている。そして、左上図では、喉内入声字「若」「各」を上字とし、「清緩」の声点に加点された「若人」「各與」を先に置いている。また、左下の図では、「眷属」を最初に挙げている。これは、「濁急」の例として掲出した「眷属俱」と対応させ、理解を促すためであろうと考えられる。これらの点から、『唯信抄』の声点図は、『観經・阿弥陀經集註』の声点図と比較してより整備されていると言えよう。なお、専修寺蔵『浄土高僧和讃』の声点図は、語例が省略され、片仮名書きであるが、壺に書き込まれた声点は、全同である。

- (3) このことは、『三帖和讃』について、名畑應順『親鸞和讃集』(一九七六年、岩波書店)「解説」に指摘されている。

- (4) i 『農旦國十四代』は国名が列挙されるのみである。その他、親鸞の訓点を移点した、専修寺蔵真佛筆『彌陀經義集』、専修寺蔵顯智筆『彌陀經義集』(建長七年(一二五五)親鸞八十三歳本奥書・永仁元年(一二九三)書写奥書)、同『聞書』、同『見聞』、専修寺蔵真佛・顯智筆『西方指南抄』を、これらに加えることができる。

- (5) ただし、本資料には、上声・去声に限り、濁「ㇿ」が使用されている。細字の註文への加点のため、返点・句点と紛れない場合は、「ㇿ」としたのではないかと思われる。

b・jの漢文訓読資料でも、清「●」・濁「ㇿ」形式の声点を用いれば、加点は容易で、統一である。しかし、漢文訓読資料では、「●」「ㇿ」は返点・句点と紛れやすいため、避けられたものであろう。

なお、「ㇿ」一例のみであるため掲げなかったが、専修寺蔵『唯信抄』(平仮名本)〔第八巻〕には、「ㇿ」の墨声点に加点されている(「宿<sup>平</sup>善」(9.1.3))。平仮名文に「ㇿ」を加点した貴重な例である。

- (6) j『西方指南抄』における声点加点例は、大部分、漢文訓読部分に存する。全七七例の声点加点例のうち、六二例は清「ㇿ」・濁「ㇿ」の形式である。残る一五例が清音「●」・濁音「ㇿ」の声点である。

- (7) このうち、1と3とが本文種の相違に基づいて使い分けられていることは、金信昌樹「親鸞の声点資料をめぐる諸問題」(「真宗総合研究所研究紀要」第七号、一九八九年二月)、同「親鸞と声点―堺真宗寺本『本事讃』について」(「印度学仏教学研究」第四一卷第二号、一九九三年三月)、同「親鸞の声点資料の研究―『唯信抄』信証本と顯智書写本の比較」(「龍谷大学大学院文学研究科紀要」二七、二〇〇五年十二月)で、部分的に指摘されている。

なお、『増補 親鸞聖人真蹟集成』所収本中、声点に加点されていない文献は、以下のものである。

○平易を旨とした漢字片仮名交じり文

一念多念文意(第四巻)、唯信鈔文意(正月十一日本(第八巻)、唯信鈔文意(正月二十七日日本(第十巻))

○短文の漢文

諸名号・讃銘(第九卷)、淨土五會念佛略法事儀贊(見聞集Ⅰ)(第九卷)、數名目(第九卷)、須彌四域經文(第九卷)、三骨一廟文(第九卷)、曇摩伽菩薩文(第九卷)、聖覺法印表白文(見聞集Ⅱ)(第九卷)、御念仏之間用意聖覺返事(見聞集Ⅱ)(第九卷)、四十八願文断簡(第九卷)、道緯略傳(第十卷)、大集經・涅槃經文(第十卷)、淨土本緣經文(第十卷)

# ○短文の漢字片仮名交じり文

淨肉文・十惡(第九卷)、或人夢(見聞集Ⅱ)(第九卷)、法然上人御消息・九条殿北政所あて(第十卷)

# ○短文の平仮名文

## 平仮名書簡(第四卷)

(8) また、ここから、入声に急・緩を区別する発音も、親鸞において、特別なものであったと考えられる。佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』(二〇〇九年、汲古書院)第三章第五章、参照。

(9) これ以外に、入声点のうち、●が朱、○が墨筆小で、全体として緩声点となっている例が一例存する(徳<sup>入</sup>「<sup>入</sup>徳」(1162.6))。同様な理由で、これも除外する。

(10) 坂東本『教行信証』における本文批判研究および本文筆跡研究の進展により、現存坂東本『教行信証』の全体は、親鸞書写の前期・中期・後期書写部分と、他者書写にかかる異筆部分とに分けられることが明らかにされた(重見一行『教行信証の研究』(一九八一年、法蔵館)、鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』(一九九七年、法蔵館))。

これらの研究に依ると、『親鸞聖人真蹟集成』全六四七頁中、前期書写部分―約四三六頁、中期書写部分―約四七頁、後期書写部分―一五六頁、異筆書写部分―約八頁分である(中期書写部分を1とすると、

前期書写部分・中期書写部分・後期書写部分・筆書写部分は、約9.22対1対3.25対0.17となる)。

朱声点は、巻二43頁、巻三62頁までの150頁中、本文前期筆蹟部分に、全体の約99%が集中する。その他は、墨声点に重ねて加点した例、同一字に墨声点と異なる声調を示した例などである。

(11) 句末か句末以外かを、親鸞加点の句切り点に依って判定し、延べ数を記した表である。句末以外の例は、後続字の頭音によつて分けた。後続字頭音は、当該字の呉音のそれを探り、本資料当該例の声点によつて清濁を判定した。当該例に声点が存しない場合は、本資料中の当該字声点加点例に依拠した。なお、喉内入声音の促音化は、力行音が続く場合に集中する。この点、同時代の他文献と同様である。佐々木勇『親鸞筆「佛説阿彌陀經」「佛説觀無量壽經」の漢字音について』(「比治山大学現代文化学部紀要」創刊号、一九九五年三月)では、それを区別して整理した。本稿では、この点是指摘済みのこととして、簡略な表にまとめた。

(12) 語の認定は加点された訓点に依り、漢語サ変動詞は一語とした。なお、『廣韻』不掲載字は、対象外とした。

(13) 奪<sup>ク</sup>命(六末15.2)・世饒<sup>ホ</sup>王<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>阿<sup>ノ</sup>彌<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>(三173.7)は、濁声点の可能性があるため、対象外とした。

(14) 他の親鸞遺文でも、次の二例がその全例である。

无<sup>ム</sup>極<sup>ノ</sup>尊<sup>ノ</sup>尊<sup>ノ</sup>(専修寺蔵「三帖和讃」浄土五四4)

寺<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>塔<sup>ノ</sup>(本誓寺蔵「皇太子聖徳奉讃」一三3)

(15) 「濕・翼・徳・督・略・弱・闊・活・述・決・殺・伐・忽」の諸字には、『親鸞・阿彌陀經集註』経本文での声点加点例が無い。

(16) 坂東本『教行信証』の「返点送仮名等」に、親鸞自筆以外の加筆が

原本の閲覧が許されたならば、②③声点の関係について精査したい。

170. 2  
(<sup>上</sup>)  
致  
(二)  
47. 7  
(<sup>平輕</sup>)  
航  
(二)  
47. 7  
(<sup>上濁</sup>)  
婆  
(<sup>上</sup>)  
藪  
(<sup>上</sup>)  
槃  
(<sup>上</sup>)  
頭  
(<sup>上濁</sup>)  
(二)  
48. 3  
(<sup>平</sup>)  
膺

(二) 3 龜(平) 51. 6 毛(去) 51. 6 樂(平) 55. 2 方(去) 57. 6 翳(去)  
身(上) 61. 1 寶(平) 62. 7 困(去) 64. 1 貌(去) 65. 2 龜(上) 65. 6 識  
(二) 65. 6 外(平) 68. 1 不(上) 捨(平) 69. 3 即(入) 言(上) 75. 7 至(上) 理  
(二) 77. 1 應(平) 生(去) 77. 2 見(平) 79. 1 165. 4 23. 3 42. 1 42. 1 42. 7 津(平) 樑  
(二) 79. 8 牽(去) 86. 4 總(平) 官(平) 87. 5 張(平) 掄(平) 87. 5 88. 5 捷(入)  
徑(平) 87. 7 清(去) 晨(平) 俛(去) 仰(平) 87. 7 不(上) 壞(平) 87. 8 微(上) 87. 8  
三 33. 3 夢(平) 幻(平) 88. 2 真(去) 88. 2 六本 3. 7 壽(平) 天(上) 88. 2 復  
(二) 88. 4 後(去) 悔(平) 88. 5 終(去) 歸(上) 94. 1 攪(去) 94. 8 狙(上) 狂  
(二) 95. 5 宗(去) 元(平) 嘉(平) 97. 3 用(平) 欽(上) 98. 1 飛(上) 錫(入) 99. 8  
首(上) 100. 1 有(平) 104. 7 116. 4 141. 5 141. 6 142. 1 7 23. 4 26. 3 26. 4 26. 5 30. 6 30. 8 54. 7  
轉(二) 108. 7 六本 53. 7 鼓(上) 110. 4 鎧(去) 115. 5 2 129. 2 局(入) 117. 3 費(平)  
(二) 125. 6 丹(去) 125. 7 勇(上) 將(上) 幢(上) 129. 2 魔(上) 軍(上) 129. 2 縛(入) 縛  
(二) 129. 5 訓(平) 130. 7 夏(平) 138. 1 日(入) 輕濁域(入) 138. 1 天(平) 子(平)  
139. 7 (二) 開(去) 闢(平) 眞(去) 心(上) 3. 3 矜(平) 哀(去) 3. 3 貶(平) 3. 5 光  
(去) 澤(入) 轉 4. 1 華(上) 4. 2 六末 96. 1 人(平) 輕濁倫(平) 4. 3 邦(去) 4. 3  
徒(平) 衆(平) 4. 3 按(平) 5. 2 長(平) 生(平) 不(上) 死(上) 5. 3 神(平) 方(去)

(三) 5. 3 妙(平) 術(入) 5. 4 心(上) 5. 6 六本 51. 8 希(上) 有(平) 6. 1  
100. 4 最(去) 勝(平) 6. 1 捷(入) 徑(平) 6. 2 顛(去) 7. 5 虛(上) 僞(上) 7. 5  
重(平) 愛(平) 7. 7 所(平) 有(平) 8. 6 諸(上) 智(平) 11. 4 至(平) 14. 6  
抱(平) 22. 1 情(上) 26. 8 明(去) 27. 1 六末 81. 3 回(上) 33. 7 道(平)  
(三) 35. 2 壞(平) 38. 1 38. 3 心(上) 41. 8 生(去) 44. 1 54. 4 54. 5 135. 4 欲(入) 覺(入)  
瞋(去) 44. 1 聞(去) 54. 3 5 42. 1 42. 6 思(上) 54. 4 獲(入) 67. 6 開(上)  
77. 5 六本 104. 6 發(入) 轉 77. 5 淳(去) 心(上) 81. 5 質(入) 多(上) 83. 8 慮(上)  
知(上) 84. 1 能(去) 88. 2 六本 17. 1 四 12. 4 衆(平) 生(平) 90. 1 者(平) 91. 5  
聽(平) 者(平) 91. 5 王(平) 日(入) 休(平) 99. 6 徑(平) 100. 3 普(平) 授(平)  
(三) 101. 3 舉(上) 102. 6 杜(上) 102. 7 玉(入) 103. 1 業(入) 儒(平) 103. 2  
才(平) 103. 2 劉(平) 雷(平) 柳(平) 子(上) 厚(平) 白(入) 樂(入) 轉 103. 2 清(去) 閑(上)  
(三) 104. 4 大(去) 醫(上) 108. 8 罪(去) 111. 4 通(去) 113. 6 放(平) 捨(平)  
115. 4 (三) 畜(平) 生(上) 116. 5 8 121. 8 婆(上) 蘇(上) 117. 5 有(平) 我(平) 118. 3 118. 4 无  
(上) 我(平) 118. 3 不(上) 破(平) 不(上) 壞(平) 不(上) 繫(平) 不(上) 縛(入) 不(上) 瞋(上) 不(上)  
喜(平) 118. 5 无(上) 我(平) 118. 6 壞(平) 滅(入) 轉 118. 7 殺(入) 者(平) 死(平) 者(平)  
(三) 118. 8 不(上) 127. 8 星(上) 130. 3 口(平) 133. 5 133. 5 133. 6 133. 7 輕(去) 133. 5 133. 6



身(去)(三) 133.5 重(平)(三) 133.5 勅(入)(殺)(入)(三) 133.7 侍(上)(臣)(平)(三) 133.7  
 先(去)王(平)(三) 134.2 生(去)(三) 135.4 非(上)有(平)(三) 141.5 141.6 141.7 141.8 142.3 142.6  
 非(上)無(上)(三) 141.5 非(上)无(上)(三) 141.6 141.7 142.4 142.6 非(上)无(上)有(平)(三) 142.1 後  
 宮(平)采(平)女(平)(三) 144.8 已(上)(三) 己(平)身(去)(三) 152.1 汚(平)空(平)(三)  
 外(去)人(平)(三) 154.7 婆(去)羅(上)囉(上)枝(平)(三) 155.8 庶(上)(三) 160.7 計  
 仁(平)義(上)禮(上)智(上)信(上)(三) 165.8 安(平)慰(平)(三) 168.1 利(入)那  
 所(平)觀(平)(三) 170.2 蛄(上)(三) 直(入)輕(平)(三) 171.8 淄(上)州(平)  
 執(入)(三) 174.2 來(去)生(上)(四) 6.5 當(去)(四) 8.2 長(上)(四)  
 高(平)(四) 23.2 循(去)(四) 23.3 身(去)(四) 26.7 會(平)(四) 29.7 是(平)(四)  
 非(上)(四) 34.1 清(去)靜(平)(四) 38.1 直(入)靜(平)(四) 43.5 應(平)(四) 46.5 六末  
 緣(上)(四) 46.7 動(平)(四) 46.7 靜(平)(四) 46.8 言(上)(四) 49.5  
 好(平)(四) 49.5 勝(平)言(上)(四) 49.6 眞(去)言(上)(四) 49.6 嘆(去)(五) 7.8 嘆(去)  
 瑕(平)穢(平)(五) 12.3 雄(去)傑(入)(五) 12.5 娟(平)飛(平)蠅(去)(五) 13.1  
 淫(去)佚(入)瞋(去)怒(上)(五) 13.3 擒(平)狩(上)(五) 辟(入)荔(平)考(平)掠(平)(五) 13.4  
 譽(平)(五) 14.5 闡(平)(五) 28.6 親(去)(五) 28.7 无(上)(五) 30.1 30.2 30.2 處(平)(五)  
 六本(七.5) 廣(平)(五) 38.6 不(上)(五) 39.7 世(平)(五) 39.7 動(平)(五) 39.8

覺(入)者(平)(五) 41.7 眼(平)見(平)(五) 42.1 42.5 42.6 聞(平)見(平)(五) 42.7 42.8 色(入)  
 貌(去)(五) 43.7 積(入)習(入)(五) 46.1 積(入)(五) 46.2 奇(上)(五) 49.2 神(平)(五) 51.1  
 作(平)(五) 51.5 世(平)(五) 54.2 明(去)朗(上)色(入)超(去)(五) 55.4 施(平)(五) 55.6  
 闇(平)(五) 55.8 赫(上)(五) 56.6 業(入)足(入)(五) 57.5 作(平)(五) 65.6 65.7 65.7 65.8 薰  
 偽(上)(六) 3.8 虛(上)(六) 3.8 樹(平)(六) 6.4 精(平)舍(上)  
 宮(平)(六) 6.8 樓(去)觀(平)(六) 6.8 覆(平)蓋(去)(六) 7.2 等(平)(六)  
 金(去)鎖(上)(六) 9.3 疑(上)(六) 9.8 蜜(入)(六) 17.4 觀(平)門(去)  
 誦(平)(六) 27.6 用(平)功(去)(六) 38.8 偽(上)(六) 39.1 便(去)  
 即(入)(六) 40.8 執(入)(六) 50.6 言(上)(六) 50.6 50.7 50.8 50.8  
 依(上)(六) 51.3 專(去)(六) 53.2 成(去)滿(上)衆(上)禍(平)(六)  
 襄(平)陽(平)(六) 67.3 性(平)(六) 70.3 有(平)(六) 71.5 人(去)我(平)  
 減(上)(六) 86.8 減(入)(六) 86.8 當(平)(六) 87.2 今(去)(六)  
 周(平)第(平)(六) 88.1 主(上)穆(入)(六) 88.1 玄(平)籍(入)籍(入)(六)  
 嘉(上)猶(去)(六) 89.3 率(入)(六) 89.4 科(上)(六) 89.4 運(去)(六)  
 衰(平)(六) 89.7 後(去)(六) 89.7 周(平)異(平)(六) 94.2 費(平)長(平)  
 周(平)異(平)(六) 94.5 六本(六.4) 怪(平)異(上)(六) 96.4 聖(平)(六)

99. 5 破<sub>(平)</sub> (六本) 104. 3 用<sub>(平)</sub> (六本) 105. 6 大<sub>(去)</sub> 雪<sub>(入)</sub> (六末) 4. 6 星<sub>(上)</sub> (六末)  
 4. 7 所<sub>(平)</sub> 行<sub>(去)</sub> (六末) 5. 6 法<sub>(入)</sub> 用<sub>(平)</sub> (六末) 6. 6 茶<sub>(上)</sub> (六末) 7. 5 坻<sub>(平)</sub>  
 (六末) 8. 8 王<sub>(去)</sub> 宮<sub>(上)</sub> (六末) 10. 6 塚<sub>(平)</sub> (六末) 27. 1 陂<sub>(上)</sub> 泊<sub>(入)</sub> (六末) 27. 2  
 受<sub>(平)</sub> (六末) 33. 2 舅<sub>(平)</sub> (六末) 56. 6 蛇<sub>(上)</sub> (六末) 57. 5 適<sub>(入)</sub> (六末) 59. 6 觀  
 (去) (六末) 60. 1 箴<sub>(平)</sub> (六末) 60. 5 玄<sub>(平)</sub> 妙<sub>(去)</sub> 玉<sub>(入)</sub> 女<sub>(上)</sub> (六末) 60. 7 常<sub>(平)</sub>  
 (六末) 61. 2 63. 4 69. 7 74. 5 牧<sub>(入)</sub> (六末) 61. 2 聖<sub>(去)</sub> 母<sub>(上)</sub> (六末) 61. 3 景<sub>(上)</sub> 裕  
 (平) 戴<sub>(去)</sub> 詵<sub>(平)</sub> 韋<sub>(平)</sub> 玄<sub>(平)</sub> (六末) 61. 4 文<sub>(平)</sub> (六末) 61. 5 62. 8 79. 4 文<sub>(平)</sub> 周<sub>(平)</sub> 孔<sub>(上)</sub>  
 (六末) 74. 4 梁<sub>(平)</sub> (六末) 61. 5 元<sub>(平)</sub> 帝<sub>(去)</sub> (六末) 61. 5 周<sub>(平)</sub> 弘<sub>(平)</sub> 政<sub>(去)</sub> (六末)  
 61. 5 太<sub>(上)</sub> 上<sub>(去)</sub> (六末) 61. 6 61. 7 2 81. 6 皇<sub>(平)</sub> (六末) 61. 6 堯<sub>(平)</sub> 舜<sub>(去)</sub> (六末) 61. 6  
 上<sub>(去)</sub> 古<sub>(上)</sub> (六末) 61. 6 大<sub>(去)</sub> 德<sub>(入)</sub> (六末) 61. 7 君<sub>(平)</sub> (六末) 61. 7 8 萬<sub>(去)</sub>  
 (六末) 61. 7 6 郭<sub>(入)</sub> 莊<sub>(平)</sub> (六末) 61. 8 典<sub>(上)</sub> (六末) 62. 2 66. 1 道<sub>(去)</sub> 家<sub>(上)</sub> (六末)  
 62. 2 玄<sub>(平)</sub> 妙<sub>(去)</sub> (六末) 62. 3 中<sub>(平)</sub> 胎<sub>(去)</sub> 朱<sub>(平)</sub> 韜<sub>(平)</sub> (六末) 62. 3 塞<sub>(去)</sub> (六末)  
 62. 3 李<sub>(上)</sub> (六末) 62. 4 玄<sub>(平)</sub> 妙<sub>(去)</sub> (六末) 62. 4 正<sub>(去)</sub> (六末) 62. 5 謬<sub>(去)</sub> 談<sub>(平)</sub>  
 (六末) 62. 5 妻<sub>(平)</sub> (六末) 62. 6 夫<sub>(平)</sub> (六末) 62. 6 形<sub>(平)</sub> (六末) 62. 6 67. 2 68. 1 68. 2 68. 3  
 產<sub>(上)</sub> (六末) 62. 7 周<sub>(平)</sub> 書<sub>(上)</sub> (六末) 62. 8 虛<sub>(平)</sub> (六末) 62. 8 實<sub>(入)</sub> (六末) 62. 8  
 信<sub>(去)</sub> (六末) 62. 8 矯<sub>(平)</sub> 盲<sub>(平)</sub> (六末) 62. 8 禮<sub>(上)</sub> (六末) 63. 1 左<sub>(上)</sub> 遷<sub>(平)</sub> (六  
 末) 63. 1 左<sub>(去)</sub> (六末) 63. 2 上<sub>(去)</sub> (六末) 63. 3 文<sub>(平)</sub> 王<sub>(平)</sub> (六末) 63. 7 隆<sub>(平)</sub> 周<sub>(平)</sub>  
 (六末) 63. 7 宗<sub>(平)</sub> (六末) 63. 7 莊<sub>(平)</sub> 王<sub>(平)</sub> (六末) 63. 8 廟<sub>(去)</sub> (六末) 63. 8 吏<sub>(平)</sub>  
 (六末) 64. 2 隆<sub>(平)</sub> 周<sub>(平)</sub> (六末) 64. 3 昭<sub>(平)</sub> 王<sub>(平)</sub> (六末) 64. 4 盛<sub>(去)</sub> 年<sub>(上)</sub> (六末)  
 64. 5 降<sub>(去)</sub> (六末) 64. 7 莊<sub>(平)</sub> 王<sub>(平)</sub> (六末) 65. 1 桓<sub>(平)</sub> 王<sub>(平)</sub> 丁<sub>(平)</sub> 卯<sub>(上)</sub> (六末)  
 65. 4 景<sub>(上)</sub> 王<sub>(平)</sub> (六末) 65. 4 姬<sub>(平)</sub> 昌<sub>(平)</sub> (六末) 65. 5 誕<sub>(平)</sub> 昭<sub>(平)</sub> 王<sub>(平)</sub> (六末) 65. 6  
 穆<sub>(入)</sub> 王<sub>(平)</sub> (六末) 65. 6 老<sub>(上)</sub> (六末) 65. 8 文<sub>(平)</sub> 史<sub>(上)</sub> (六末) 66. 2 老<sub>(上)</sub> 君  
 (六末) 66. 4 群<sub>(平)</sub> 胡<sub>(平)</sub> (六末) 66. 7 賴<sub>(去)</sub> 鄉<sub>(平)</sub> (六末) 67. 1 秦<sub>(平)</sub> 佚<sub>(入)</sub> (六  
 末) 67. 1 弔<sub>(去)</sub> (六末) 67. 2 遁<sub>(去)</sub> 天<sub>(平)</sub> (六末) 67. 2 1 漢<sub>(去)</sub> 明<sub>(平)</sub> (六末) 67. 3  
 蘭<sub>(平)</sub> 臺<sub>(平)</sub> (六末) 67. 4 書<sub>(平)</sub> (六末) 67. 4 秦<sub>(平)</sub> 佚<sub>(入)</sub> (六末) 67. 5 7 夫<sub>(平)</sub> (六  
 末) 67. 6 哭<sub>(入)</sub> (六末) 67. 7 道<sub>(去)</sub> (六末) 68. 1 4 4 73. 8 77. 3 免<sub>(上)</sub> 縛<sub>(入)</sub> (六末)  
 68. 2 68. 3 柩<sub>(上)</sub> (六末) 68. 8 戎<sub>(平)</sub> 狄<sub>(入)</sub> (六末) 68. 8 右<sub>(上)</sub> 命<sub>(去)</sub> (六末) 68. 8  
 冢<sub>(上)</sub> 鄉<sub>(平)</sub> (六末) 69. 1 介<sub>(去)</sub> 鄉<sub>(平)</sub> (六末) 69. 1 史<sub>(去)</sub> 記<sub>(平)</sub> (六末) 69. 2 藺<sub>(去)</sub> 相  
 如<sub>(平)</sub> 功<sub>(平)</sub> (六末) 69. 2 龜<sub>(平)</sub> 頗<sub>(平)</sub> (六末) 69. 3 張<sub>(平)</sub> 儀<sub>(平)</sub> 相<sub>(去)</sub> (六末) 69. 3  
 犀<sub>(去)</sub> 首<sub>(上)</sub> (六末) 69. 4 皇<sub>(平)</sub> 哺<sub>(去)</sub> (六末) 69. 6 高<sub>(平)</sub> 士<sub>(平)</sub> (六末) 69. 6 楚<sub>(上)</sub>  
 (六末) 69. 6 相<sub>(去)</sub> 人<sub>(平)</sub> (六末) 69. 6 李<sub>(上)</sub> 耳<sub>(上)</sub> (六末) 69. 7 8 酤<sub>(平)</sub> 康<sub>(平)</sub> (六  
 末) 69. 8 涓<sub>(平)</sub> (六末) 69. 8 疾<sub>(入)</sub> (六末) 69. 8 衆<sub>(平)</sub> 晝<sub>(平)</sub> (六末) 70. 1 信<sub>(去)</sub> (六

末 70. 2 先 5 上 氣 3 平 光 6 末 70. 3 用 張 陵 左 上 道 信  
(六末 70. 5) 天 常 6 末 70. 5 召 6 末 70. 6 介 6 末 70. 7 卓  
(六末 70. 8) 爾 上 孝 6 末 71. 1 忠 6 末 71. 1 聲 教  
(六末 71. 2) 百 王 6 末 71. 2 玄 風 6 末 71. 2 古 6 末 71. 3  
常 然 6 末 71. 3 楷 上 義 6 末 71. 4 仁 6 末 71. 4  
孝 6 末 71. 4 善 6 末 71. 7 道 德 6 末 71. 8 禮 6 末 71. 8  
忠 信 6 末 71. 8 環 仁 6 末 72. 1 匹 婦 大 孝 6 末  
72. 1 中 夏 6 末 72. 2 華 俗 6 末 72. 2 原 6 末 72. 3 子  
桑 6 末 72. 3 子 貢 6 末 72. 3 孝 6 末 72. 4 人 父 6 末  
72. 4 天 下 6 末 72. 4 忠 敬 6 末 72. 5 人 君 6 末 72. 5  
化 6 末 72. 5 明 辟 6 末 72. 6 仁 6 末 72. 6 聖  
王 6 末 72. 6 臣 孝 6 末 72. 7 榮 6 末 73. 3 清 虛 6 末  
73. 5 勢 競 6 末 73. 6 文 史 6 末 73. 6 齊 桓 楚 穆  
(六末 73. 7) 聖 6 末 73. 7 二 6 末 73. 8 化 6 末 73. 8  
75. 6 淳 風 6 末 74. 1 三 聖 6 末 74. 1 澆 6 末 74. 3 玄  
虛 冲 6 末 74. 3 詩 書 禮 樂 6 末 74. 3 教 6 末

末 74. 4 階 梯 三 畏 6 末 74. 5 由 漸 6 末 74. 5 談 6 末  
74. 6 方 6 末 74. 7 遠 6 末 74. 7 苑 馬 6 末 74. 8 殷 周  
(六末 75. 1) 炎 威 6 末 75. 1 雷 6 末 75. 2 王 6 末 75. 3 雲  
霓 變 6 末 75. 4 后 6 末 75. 4 周 書 6 末 75. 4 漲 穆  
王 6 末 75. 5 暴 風 6 末 75. 5 齊 梁 王 公 守 牧 清  
信 6 末 76. 3 澠 瀆 清 臺 6 末 76. 6 南 平 6 末 76. 7  
文 宣 6 末 76. 7 蕭 后 6 末 76. 8 宗 皇 6 末 76. 8 模  
(六末 77. 1) 無 目 6 末 77. 2 有 靈 6 末 77. 2 通 6 末 77. 3  
智 6 末 77. 4 稱 6 末 77. 4 然 6 末 77. 5 信 6 末 77. 5 4  
85. 4 郭 6 末 78. 3 患 6 末 78. 4 夫 子 6 末 78. 4  
子 淤 6 末 78. 5 神 解 6 末 78. 5 1 孔 丘 6 末 78. 6 蕭  
然 6 末 79. 1 累 6 末 79. 1 夫 子 6 末 79. 2 劉 向 古  
舊 6 末 79. 3 流 上 6 末 79. 3 老 6 末 79. 5 君 子 6 末 80. 6  
大 霄 隱 書 元 真 書 6 末 80. 6 元 上 大 道 君  
(六末 80. 7) 大 羅 6 末 80. 7 玉 京 6 末 80. 8 金  
床 6 末 80. 8 侍 6 末 81. 1 神 仙 6 末 81. 1 大 道 6 末

81. 2 大(去)玄(平)都(平)(六末 81. 2) 光(平)(六末 81. 2) 金(平)(真(去)(六末 81. 3))  
 郡(去)(六末 81. 3) 縣(去)(元(平)(六末 81. 3)) 鄉(平)定(去)志(上)(六末 81. 3) 大(去)  
 羅(平)(六末 81. 4) 上(去)天(平)(六末 81. 5) 大(去)道(去)道(去)(六末 81. 6) 道(平)神  
 明(平)君(平)(六末 7) 静(去)(六末 81. 7) 太(去)玄(平)(六末 81. 7) 樓(平)都(平)  
 (六末 81. 8) 朝(平)晏(去)(六末 81. 8) 玉(入)京(平)(六末 82. 1) 道(去)君(平)(六  
 末 82. 1) 宋(去)人(平)陸(入)脩(平)静(去)(六末 82. 2) 書(上)文(平)藝(去)文(平)志  
 (六末 82. 5) 陶(平)朱(平)(六末 82. 6) 范(去)蠡(上)(六末 82. 6) 越(入)王(平)勾(平)  
 踐(去)君(平)臣(平)(六末 82. 7) 吳(平)(六末 82. 7) 屎(去)(六末 82. 7) 范(去)蠡(上)  
 (六末 82. 8) 變(去)化(去)(六末 83. 1) 老(平)子(平)(六末 83. 2) 幽(平)王(平)(六  
 末 83. 2) 后(去)(六末 83. 3) 柱(去)史(上)(六末 83. 3) 臣(平)(六末 83. 4)  
 犬(上)戎(平)(六末 83. 5) 君(平)父(上)(六末 83. 6) 陸(入)脩(平)静(去)(六  
 末 83. 7) 静(去)(六末 83. 8) 玄(平)都(平)錄(入)(小声点追加)(六末 83. 8) 偽(平)(六  
 末 84. 1) 公(平)鄉(平)(六末 84. 4) 周(平)公(平)(六末 84. 5) 邪(上)信(去)(六末  
 84. 6) 百(入)侯(平)王(平)宗(平)室(入)(六末 84. 8) 清(平)信(去)(六末  
 85. 3) 清(平)(六末 85. 4) 表(上)裏(上)(六末 85. 4) 垢(平)穢(平)(六末 85. 4) 災(平)  
 鄭(平)(六末 86. 4) 子(平)(六末 88. 8) 悵(平)鬼(上)(六末 90. 2) 時(上)媚(平)(六末

90. 2 魔(上)羅(上)(六末 90. 3) 信(平)(六末 90. 3) 釋(入)門(去)(六末 91. 4) 洛(入)  
 都(上)儒(平)林(平)(六末 91. 5) 辯(去)(六末 91. 5) 聖(去)曆(入)(小声点追加)(六末 92. 1)  
 主(上)上(去)臣(平)下(上)(六末 92. 2) 法(入)達(上)義(上)(六末 92. 2) 大(去)祖(上)  
 (六末 92. 3) 禿(入)(六末 92. 6) 聖(去)代(平)建(去)曆(入)(六末 92. 8) 建(去)(六末  
 93. 5) 曆(入)(小声点追加)(六末 93. 5) 教(上)命(去)(六末 95. 3) 簡(上)要(平)(六末 95. 4)  
 徵(上)(六末 96. 5) 念(平)(六末 97. 2) 至(上)孝(平)(六末 97. 3) 詮(上)(六末 98. 1)  
 人(平)倫(平)(六末 98. 2)

〔右以外の墨声点を墨声点小と判断した。なお、『親鸞聖人真蹟集成』の朱声点は、その凡例に記されるとおり、復元されたものであり、原本と異なる場合がある。〕

〔付記〕本稿は、平成二十三年十月十六日に、東京大学山上会館にて開催された、第一〇五回 訓点語学会研究発表会における発表を基に成したものである。

ご指導下さった皆様に、御礼申しあげます。

〔ささき いさむ、広島大学大学院教授〕

(平成二十三年十月三十日受理)